

# 浦 城 跡

筑紫郡太宰府町所在中世城跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 4 5 集

1 9 7 0

福岡県教育委員会

# 浦 城 跡

筑紫郡太宰府町所在中世城跡の調査

## 序

この報告は、本年度、福岡県教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査のうち、重要と思われるものの一つである。わが国の歴史研究の一資料として活用いただければ幸甚である。

昭和45年3月31日

福岡県教育委員会教育長

吉 久 勝 美

## 例 言

1. 本書は、昭和44年7月30日～8月24日に、福岡県教育委員会が緊急調査した浦城跡の調査報告である。
2. 本書の執筆は次のとおりである。
  1. ..... 宮小路賀宏
  2. ..... 宮小路賀宏
  3. ..... 栗原和彦
  4. A・B・E・F・I・J ..... 栗原和彦  
C・D・G・H ..... 前川威洋
  5. ....
    1. ..... 前川威洋
    2. ..... 宮小路賀宏
    3. ..... 栗原和彦
  6. ..... 栗原和彦  
付 ..... 栗原和彦
3. 掲載の写真は調査員が各々撮影した。  
なお、図版1・2は、朝日新聞社の提供である。  
実測図の作成は挿図目次に示すとおりである。
4. 本書の編集は、栗原・宮小路・前川が行なったが、主に栗原が担当した。

## 本文目次

1. はじめに .....	3
2. 位置と地形 .....	3
3. 大宰府浦城と少弐氏について .....	4
4. 調査区の概要 .....	8
5. 出土遺物 .....	13
1. 土師器 .....	13
2. 陶磁器 .....	20
3. その他の遺物 .....	23
6. おわりに .....	26
付 .....	
1. 少弐氏系図 .....	27
2. 少弐氏略年表 .....	28

## 図 版 目 次

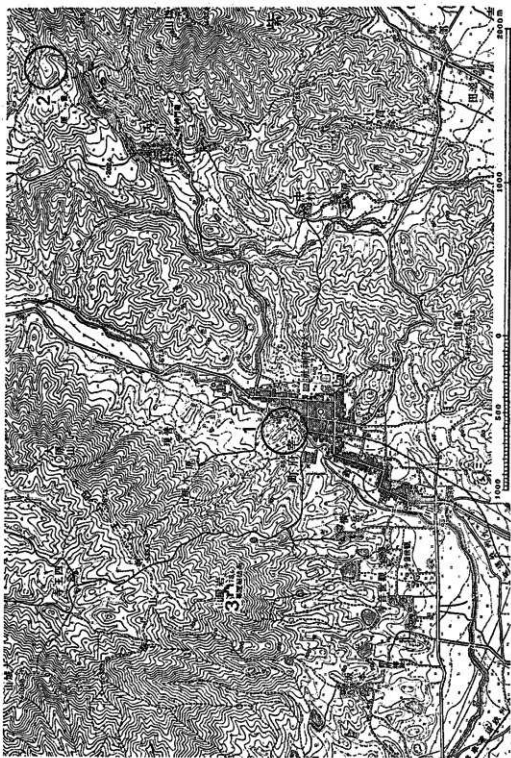
本文対照頁

図版 1	浦城跡航空写真	4
2	浦城跡航空写真	4
3	(1) 浦城跡中央部谷間	4
	(2) 浦城跡から太宰府平野を見る	4
4	出土土師器	13
5	(1) 天 目	22
	(2) 白磁深皿	20
	(3) 青磁及び白磁	20
6	(1)火 舎	25
	(2)摺 鉢	25

## 挿 図 目 次

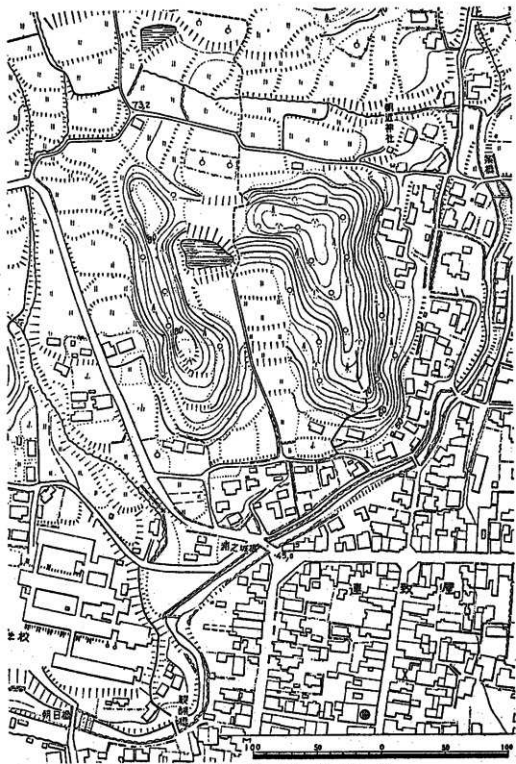
1. 浦城跡位置図 (国土地理院地形図 1 : 25,000, 宮小路作成) .....	1
2. 浦城跡地形図 (太宰府町役場作成 1 : 3,000) .....	2
3. 浦城跡地形実測図 (浦ノ城土地区画整理組合提供, 大久保設計KK補足, 宮小路製図) .....	5
4. Aトレンチ遺構実測図 (栗原製図) .....	9
5. Aトレンチ西壁土層図 (栗原製図) .....	9
6. C-5区北壁土層図 (前川製図) .....	11
7. D-3区西壁土層図 (前川製図) .....	11
8. D-7区西壁土層図 (前川製図) .....	12
9. F区西壁土層図 (栗原製図) .....	12
10. 土師器Ⅰ類実測図 (前川実測製図) .....	14
11. 土師器Ⅱ類実測図 (前川実測製図) .....	15
12. 土師器底部拓影 (宮小路手拓, 前川作成) .....	16
13. 浦城跡出土土師器の法量 (前川作成) .....	19
14. 青磁及び白磁実測図 (宮小路実測製図) .....	21
15. 天目及び陶器実測図 (宮小路実測製図) .....	22
16. 出土瓦類 (栗原手拓作成) .....	24
17. 日用雑器類 (栗原・前川実測, 栗原製図) .....	25
18. 刀のハバキ・元祐通宝 (栗原作成) .....	26

なお、調査区の実測図作成は、宮小路、栗原、前川が行った。



第1圖 蒲城跡位置圖 (1—蒲城跡, 2—有智山城跡, 3—岩屋城跡)





第2圖 浦城跡地形圖

## 1. はじめに

浦城跡が文化財保護法による所定の手続をとられることなく削平工事により破壊されはじめたのは、昭和41年6月のことで、当教育委員会がこの工事実施を知ったのは7月に入ってからである。太宰府町教育委員会と保存について協議を行なったが、強力な手段を取らなければ保存不可能な状態であった。工事は、浦城跡の約6分の1を削平して終了した。

しかし、土地所有者によって「浦之城土地区画整理組合」なるものが結成され、昭和45年5月再び宅地造成を目的とした削平工事が開始された。工事は急速に進み、浦城跡の約3分の1が破壊された。したがって県教育委員会は、やむを得ず国庫補助金の申請を行ない、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとした。

発掘調査には当教育委員会技師宮小路賢宏・栗原和彦・前川威洋・主事小村一世(経理担当)が当たった。

発掘調査は昭和44年7月30日から8月24日まで実施した。

予算及び期間のうえから限られた調査を余儀なくされていたが、加えて浦城跡中央谷間における調査において、遺構面の深さと湧水、湧水によるトレンチ壁の崩壊はこの調査を危険な苦しいものにした。

調査面積は上記悪事件のため極めて少なく、したがって遺構の検出も少なかった。

調査にあたっては、松本商事社長松本哲勇氏及び平山組社長平山孝氏並びに浦之城土地区画整理組合のご協力があった。記して謝意をあらわす。

## 2. 位置と地形

**位置** 浦城跡は、福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字浦之城に所在する。

太宰府都城を構成する狭少な平野の東端が、四王寺山と宝満山との山間に細く延びた一画に太宰府天満宮がある。この太宰府天満宮の西、四王寺山麓に浦城跡は位置している。

浦城跡の西方約2.3kmに筑前国分寺跡、南西方約1.7kmに太宰府政庁跡、同じく約1.3kmに観世音寺跡、同じく約0.8kmに横岳山崇福寺跡、背後の四王寺山には大野城跡、北東約2kmに内山寺跡、北に接した地域には原山無量寿寺跡等が所在していて極めて豊かな歴史的環境のなかにある。

中世の山城跡は所々にあるが、浦城跡周辺においては、北東方約3kmに有智山城跡（大宰少貳居館跡）、同じく3kmに龍門山城跡、西方約1kmに岩屋城跡、南西約3kmに天判（押）城跡等があげられる。

浦城跡の南面には御笠川が流れているが、この川は浦城の防備にとって重要な役割をはたしていると考えられる。浦城の東側に接した御笠川の一部を岩踏川と呼称して、この岩踏川に次の為頼の歌がある。

うみ山をけふこえくれはみ笠なる  
いわふみ川に駒なつむなり

現在の福岡市から宇美町を経て太宰府に通ずる古道があったことが知られる。

地 形 浦城跡は、四王寺山塊の支流の先端にある。山麓でゆるやかな傾斜に変化したなかで、独立丘の地形をとっている。

浦城跡の地形について貝原篤信は「筑前統風土記拾遺一古城古戦場・御笠郡一」に次のように記している。

浦古城大宰府祠麿の西、原山との間にある小山なり、西方高き所三畝許、其次一段低き処一段余、又其次高き処北方五畝許、東の方最高き処長サ二十五間許、その東面又南の尾にも段々に平地有、何れも今は圃と成れり、此処ハ天慶年中藤原純友四国を落て大宰府を侵冠せし時籠りし城址也といふ。

上記々録にもわかるように浦城は南に下る谷を囲んで「コ」字形に高まりがある。さして高い丘ではないが急峻である。東側の尾根を「ジョウセン山」、西側の尾根を「ナラコ山」と呼称されている。中央の谷は水田となっていて、奥に明治32・33年頃造られたという灌漑用溜池がある。

中央の谷を通過して南から北に小道があるが、この道が北側尾根を横断する頂部は幅約30mにわたって一段低く造成されていて、ここに北門が設けられていたのではないかと考えられる。観応四年正月廿五日に左馬助が由比重富次郎四郎にあてた感状のなかに「為浦城御後攻一略一」とあるのは、北側からこの尾根に向っての攻撃であったと思われる。ここからは、溝状遺構が検出された。

先にも述べたが御笠川の流れは、この浦城の東側の防備に重要な役割をはたしている。浦城は、「コ」字形の急峻な斜面を持つ丘陵と御笠川の流れをうまく利用した城跡である。

### 3. 大宰府浦城と小貳氏について

浦城は少貳氏の城であった。浦城が、文献に出てくるのは、きわめて少なく限られている。



第3圖 浦城跡地形実測図（0点は、標高46m60cm・昭和44年4月現状）

従って、その沿革や性格について、文献資料に基づいて確たる断定は出来ない。しかし、発掘調査報告の前置として、「大宰府、大宰府天満宮史料、中世1～8」<sup>(1)</sup>、「邪馬台と大宰府」<sup>(2)</sup>をもとに略記しておきたい。

註(1) 九州文化総合研究所 大宰府調査文献収録

(2) 長沼賢海著 大宰府天満宮文化研究所発行

少武氏について 武藤小次郎資頼は武蔵の人である。資頼が大宰少武となって以来、補任のあるなしにかかわらず、ずっと少武を名のっている。資頼のとき、肥前、筑前の守護職として、大友、嶋津と三者で、九州を分けている。

少武氏が活躍するのは、元の襲来のときである。文永、弘安の役においては、資能を党首として、経景、景資、資時ら一族をあげて防戦にあっている。世論が不統一のなかであるため、幕府の防衛軍も必ずしも統一できないなかで全軍の大將として戦った。なかでも景資は敵將劉相公を討ちとるという華々しい戦果を上げている。

しかし、弘安5年以降、少武氏の大宰府の奉行所は、北条時定の下向によって鎮西奉行所となり、大宰府から博多へかわる。この結果、少武氏は、鎮西評定衆引付衆として鎮西奉行所の役人となった。正和、元享年間、探題が末補充のとき大友氏と政務にたずさわるが、一時的なものにすぎない。

やがて、鎌倉幕府が滅亡すると、大友氏等と探題北条英時を討伐し、建武の新政権側になった。すぐに後醍醐天皇と足利尊氏の仲がわれ、尊氏が京都から敗走してくると、その配下になった。尊氏は、九州の兵を率いて東上し、征夷大將軍となったが、そのころから、少武氏は肥後の南軍と戦わなければならなかった。やがて足利方からは、博多に一色範氏が探題となってきた。

しばらくして足利直冬が、尊氏とわかれて九州にくると少武氏はこれにつく。その結果、宮方(南朝)、將軍方(北朝)、直冬方の三つの勢力があらそわれることになる。一色氏は、南朝方に下り、直冬、少武氏に対抗したが、直冬が、九州から出たあと、一色氏は、尊氏方に逆もどりし、少武氏は、宮方になつて針摺原で一色氏を破っている。こうして一色氏の勢力が九州で弱くなると少武氏は、大友氏と宮方にねがえりうった。このため、菊池氏を主力とする宮方に攻めたられ、ついに大宰府で負けてしまった。少武頼尚は豊後にのがれるが、ついに大宰府にかえることはなかったようである。

その後、少武冬資は応安年間に足利義満が菊池氏を討ったときの恩償に、筑前、肥前、又は筑後、肥前を給うがすぐに今川、大内氏等に殺されている。少武氏は、その後も対島にのがれて大宰府の失地奪還をはかるが取りかえせずに終っている。

註 文中の○内の数字は、年表に記した番号である。

浦城の沿革 浦城の名が文献に見えるのは、かなり限られて少ない。

1. 舊藩日記 前集18節 師久公讞中

—就大宰府浦城合戦難— 文和2年3月5日

2. 重富文書, 筑前

為浦城御後攻一, 觀心4年1月25日

3. 大平記, 三十三

—此ハ、去年大宰少貳古浦城ニ己ニ一色宮内大輔ニ討レントセシテ、菊池肥後守大勢ヲ以テ後攻マシテ—

4. 征西將軍宮譚

—大平記大原合戦に、少貳が古浦城にて一色入道に囲まれて難儀したりしを—

5. 筑前國統風土記拾遺, 古城古戦城・御笠郡

浦古城大府神廟の西, 一

などである。

浦城合戦の時期について、はっきり書かれたものはないが前後の記録から針沼原の戦いまでのことである。浦城の存在を語る資料は、この一時に限られている。

寶頼以来の大宰府守護所の位置、浦城の創設される時期については、長沼先生の意見がある。先生は「当時大宰府も守護所も国衙に同居していた。」とされ、浦城の創立について、大宰府、大宰府天満宮資料にある「追加」という書名の文獻について、「此の『追加』という書名には最初に脱漏があると思ふ。或は東京大学の史料編纂所か、或は図書館か、其の他に『追加』とのみある此の種の異本があるのかとも思ふ。此の条々は侍所汰汰篇（群書類聚）新編追加、新御式目（何れも統群書聚）にも載っていて互いに異同出入がある。」とされ、その中の

4. 一、城塚事

次岩門并大宰府樺城塚之条。為九州官軍。可得其構。云々。早為領主所之沙汰。可致其構。云々。

を引いて、「弘安5年奉行所が博多に設けられた際、幕府は少貳氏の為に大宰府及び岩門城を築かしたものであろう。」「経資が支配していた守護所、それは同時に大宰府であったものが博多に移されたので、幕府は其補償且つ恩賞として経資の為に大宰府城を造らしたものであろう。後、大宰府城と言ひ更に後には単に浦城と言つた。」とされているのである。

その後、正慶2年には、鎌倉幕府が滅亡し、鎮西探題もほろびる。すぐあとに尊良親王が原山寺に座し、足利尊氏も原山寺の一坊に入っている。

この原山寺とは、原山無量壽寺のことで、俗に原八坊と呼ばれている。この寺の歴史は、はっきりとしないが、筑前國統風土記には、管公左遷の前より己にこの寺があったとしている。この原山寺をしのぶ江戸末期頃の古図の模写があるが、浦城跡が、「浦ノ坊」としてかかっている。

江戸末期のものから室町時代のことを推しはかることは出来ないとしても原八坊と浦城の関係をなにか暗示しているように思える。

正平5年頃から、少武と肥後の南朝方とはしばしば戦う。少武が南軍となつて一色氏を討つた後、南朝方にねがえりをうったため大宰府に攻めたてられ負ける。この康安元年の戦いは、かなり打撃を少武氏に与へたものであった。以後12年間、南朝方が大宰府にいる。浦城の終焉は、不明であるが、この康安元年頃ではなからうか。

註1 邪馬台と大宰府 453頁

2 同上 454頁

3 " 457頁

4 " 458頁

浦城の性格 少武氏の居館は大宰府町内山の東北、九重原にある。空満岳の中腹で尾根の広がっている場所に現在でも土塁と掘りどが残っている。

これが有智山城であつて、いわゆる中世の山城の形をとっている。これに対して浦城は、平地から一段高い場所にあるが、平地にあるといってもさしつかえない。この点について長沼先生は、「鎌倉末期から始まる地方豪族の居館の形式である。」と言われる。さらに、城の性格について「浦城を内山城の出城又は支城と考えたのは誤りで、本末転倒である。浦城は幕府が少武の為に築いた府の公城、公館であり、内山城は少武の私館である。」とされるのである。

博多に鎮西奉行所が移されたのちに、少武氏に残された、大宰府の公的、役所的な唯一のものが浦城であつたかと思われる。

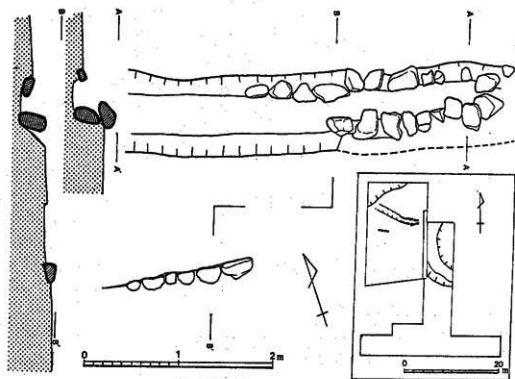
註1 邪馬台と大宰府 458頁

2 同上 459頁

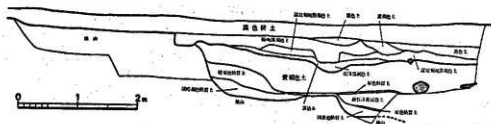
#### 4. 調査区の概要

発掘調査にあたっては、トレンチを掘った順番にA～Jの名称をつけた。A・B・I・Jは、中間の山から、ジョウセン山にかけてのトレンチであり、C・D・E・F・G・Hは、谷間に設定したトレンチである。

Aトレンチ 俗称ジョウセン山とナラコ山の中間の山(標高79m)の部分は、平坦となつていて建築遺構があることが予想された。その為この地点にT字形にAトレンチを設定し遺構の出かたでさらに拡張するつもりであつた。しかし発掘の結果、表土のすぐ下が地山となる部分が多く、わずかに南北に設定したトレンチの中央から、北端にかけて地山が下がり、この部分では



第4図 Aトレンチ遺構実測図



第5図 Aトレンチ西壁土層図

堆積土が地山の上にあることがわかったが、遺構らしいものは、まったく検出できなかった。そこで、南北トレンチの西壁にそって幅30cmほどの溝を掘り土層の観察を行なった。地山は、南北トレンチのほぼ中央あたりから一段さがり2mほど平坦な場所ができ、その先は北の崖に向かって斜面となって続いている。この地山上の堆積土には、かなりの量の土器が入っていたが、遺構として認められるものがないので多少の疑問を残しながらも、他の地点の調査も



あるので発掘調査を一応打切った。

しばらくして、土地開発業者の好意によりブルドーザーによる、より広範囲を排土する機会が与えられた。まず南北トレンチの東側をブルドーザーによって排土したが、Aトレンチの状況と変わりなかった。つぎに、南北トレンチの西側を排土したところ、東西にならんだ石列にあたってためブルドーザーを止め、石列を中心に拡張区を設定した。この石列は、東西溝の側石であった。

東西溝は、整地土を掘って作られたもので、現長で4.5mあり、東の部分2.3mだけに河原石を用いた側石が残っていた。側石は、部分的に2段残っている所があるので、40cm程の深さとなる。その性格は、不明であるが雨落溝のようなものかと思われる。溝の東側は、南北トレンチにかかるが、土層図では、「落込み」の位置にあたり、全体を削りとられていて、西側は崖にあたって終わっている。

この東西溝の南側で、北面をそろえた形で東西の石列がみつまっているが、東西溝とやや方向を異にするため、時期を異にするものと思われた。しかし両者とも削平されているため、土層ないしは、切合い関係による前後関係は、不明である。

この東西溝、石列は、ある時期の浦城の建築物の北端を示すものとも思われるが、東、南、西の端をつかむことが出来ずに終わっている。

又、この遺構の北側で元祐通宝、火舎、土師器片などの出土があった。しかし、残りはよくない。

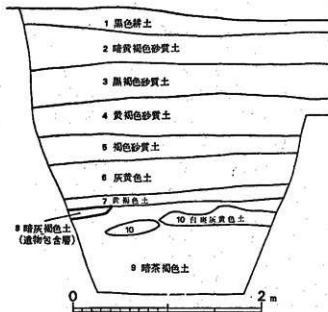
**Bトレンチ** Bトレンチは、Aトレンチの東に、幅3m、長18mのトレンチを尾根にそって設定したが、Aトレンチと同様、表土の下がすぐに地山となり、遺構らしきものはまったくみつからない。なお、刀のハバキが表土からみつまっている。

**I・Jトレンチ** ジョウセン山の尾根の部分に設定したが、Bトレンチと同様、表土の下は、すぐに地山となっていた。ただ、南の方が、より表土が厚く堆積していた。遺構はまったく残っていない。

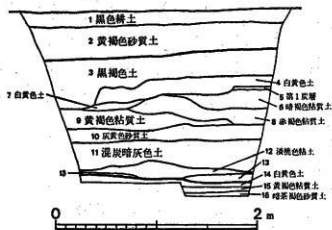
**Cトレンチ** 谷の北側最奥部に東西27m、幅3mのCトレンチを設け、3mごとに区切って西側から1～8区を設けた。このうち奇数番号区を全部掘り、他は北側半分を深さ1mほど掘りさげた。

しかし、遺構もみつからず、まだ包含層が下の方へ続きそうであったため1・5・8区をさらに掘りさげた。

全体的にいって地表から黒色耕土層、暗黄褐色砂質土層、黒褐砂質土層となっていて、土師器杯なども出土するが、近世の陶磁器の混入もあり、攪乱をうけていた。その下の黄褐色粘質土および黄褐色砂質土との境目付近には、土師器が散在していた。C-1区では、深さ2.4mまで掘り下げたが地山まで到達しなかった。C-5区では、5層まで糸切り底に板目がついた



第6図 C-5区北壁土層図



第7図 D-3区西壁土層図  
(第13層は灰色砂質土)

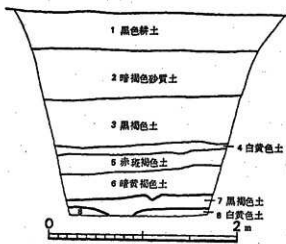
大小のビット群や平石や礫などが発見された。そのビット内から糸切り痕と板目を有する皿形土師器の出土があった。たしかに、この面がある時期の遺構面であることにはちがいないが、その性格については発掘面が狭いこともあって不明である。

D-7区では、7層でへら切り底の土師器が出土し、それより上部の層では糸切底をもつ土

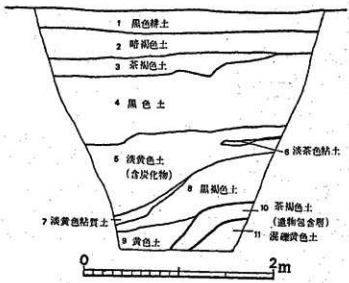
師器が出土しているが、8層では今までとちがってへら切りの土師器が土器層とでもよぶことができるくらい多量に出土し、その層は南に傾斜していた。さらにその下深さ3mまで掘りさげたが地山まで達しなかった。C-9区では、地山直上8層まで糸切り底土師器が出土し、地山面にはビットが数個発見されたが、その性格は不明である。

Dトレンチ 谷の東側中央の山すそに平坦面があり、そこにほぼ南北に21m、幅3mのDトレンチを設定し3mごとに区切って、北から1~7区とした。そのうち、1・3・5・7区の発掘にかかった。

土層はほぼ水平で、特に遺構面らしきものは3区を除いて発見できなかった。D-3区では、地表下40~160cmの間に薄手の土器で小さな底部に糸切り痕のみがついている土師器が数個出土した。その下部には遺構面と考えられる



第8図 D-7区西壁土層図



第9図 Fトレンチ西壁土層図

節器が出土している。

**Eトレンチ** EトレンチはCトレンチの南で一段さがった田に幅3m、長さ15mのトレンチを設定し、なんとか遺構面まで到達するためにブルドーザーによる排土を試みたがブルドーザーがうまってしまい、北端E-1区と南端E-5区を坪掘りするにとどまった。

しかし、この発掘区も湧水と壁の崩壊のため、わずかにE-5区で地山をたしかめたのがやっとであった。

E-1区の土層は、ほぼ水平堆積で地表下2.4mの間に7層程が認められた。糸切り底の土師器が若干出土した。

E-5区では、地表下2.8mで地山に達している。土層は表土から3層まではほぼ水平堆積であるが、それ以下の土層は南に15°~20°ほどひくく傾斜している。出土遺物は、糸切り底の土師器があるが、比較的少ない。

**Fトレンチ** Eトレンチの南1段下の田を深いことを予想して3m角の坪掘を行なった。地表から2.5mの深さまで掘りさげたところ、壁の崩壊と湧水がひどくなったうえ、第9層から多量の糸切り底の土師器

の出土があったため、それ以下の発掘を絶念した。土層の状況は表土から4層まではほぼ水平堆積をしているが、5層からはしだいに急傾斜となって南に下がっている。

Gトレンチ 地表から1.7mまでは黒褐色の土層が、ほぼ水平堆積で続き、これらの層からは糸切り底土師器片や青磁片とともに近世陶磁器片も出土している。

これ以下は、植物の炭化物を含む青灰色砂質粘土層で糸切り底をもつ土師器を出土する。地表から約3m掘りさげたが地山には達していない。

Hトレンチ 地表下3.4m程の深さまで掘った。土層は、耕作に関係のある1・2層は、ほぼ水平堆積であるが、その下2m程まではかなりの傾斜で南にひくくなっている。さらにその下では青灰色の土層が主となるが上層に比べて傾斜はゆるくなる。遺物は糸切り底の土師器が若干出土している。この地点でも地山には達していない。

## 5. 出土遺物

遺構の残りが悪かったのに比べて遺物の出土量はかなり多い。多量の土師器とともに陶磁器、瓦などが若干出土した。出土場所としては、A・C・D・Fなどのトレンチからの出土が特にめだつた。

### 1. 土師器

土師器は各トレンチから普遍的に出土していて量も圧倒的に多い。そのうち特にAトレンチ、Cトレンチ、Fトレンチの1部からは、まとまった形で多量に発見された。それでこれらの一括資料を単位にして、土師器について述べてみたい。

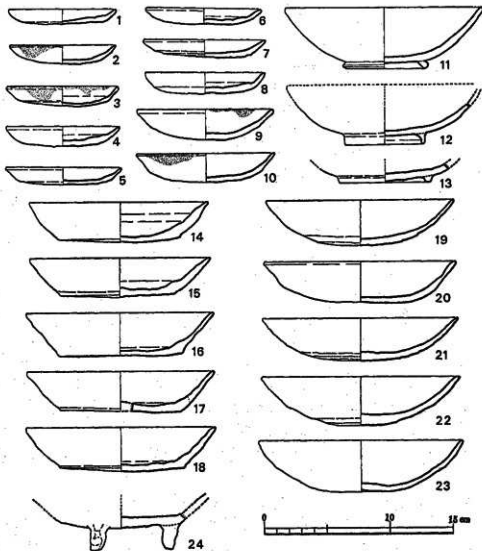
なお土師器の底部には二種類あり、ヘラ切り底をもつものをI類、糸切り底をもつものをII類とした。

#### I 類 (第10・12図、図版4の1~10)

C-5区8層から発見された土師器を一括してこの類の基準とした。I類の特徴は、底面に渦巻状のヘラ切り痕を残していることで、さらに乾燥時についたと思われる板目がついている。この類の土師器はD-7区7層でも発見されている。

器形は、次の6つに分類出来る。

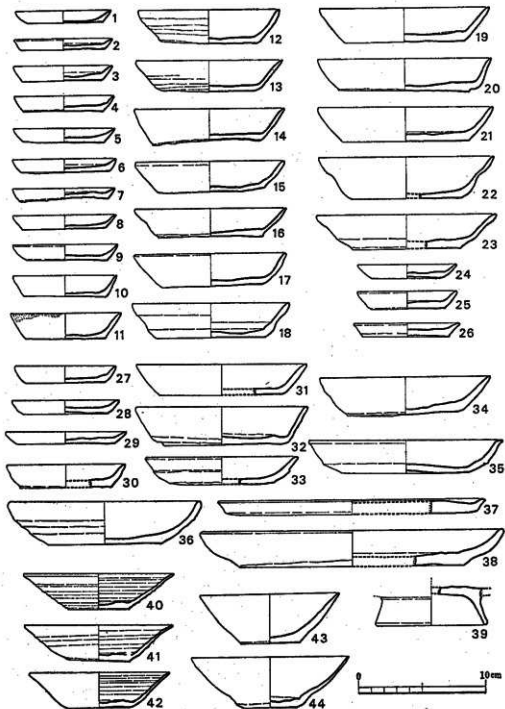
a, 小皿そのI (I-a) (第10図1~8) 口径9.8~8.6cm, 高さ1.65~1.1cmの小皿で、黒褐色ないし黄褐色を呈している。本来は平底であろうが、ヘラ切りのために丸底に近い形をしているものが多い。なお一部の口縁部に煤が付着したものが灯明皿として使用されたものであろう。胎土は比較的良好であまり砂粒を含まない。器壁の内外は横なだが、底部内側中央部(以後、内底とする)には縦なだが認められる。底部下面(以後、底面とする)には渦巻状のヘラ切り痕がある。8・15の底面は第12図の1・2である。



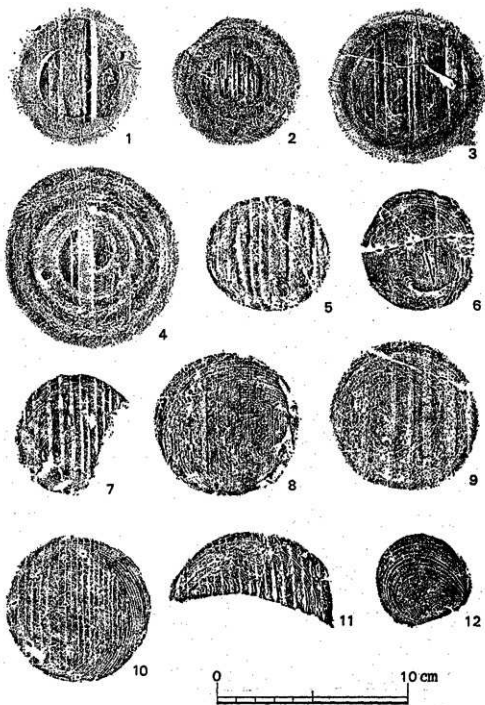
第10図 土師器Ⅰ類 夾器類 (C-5区8層出土、ただし12・24はD-7区7層、13はHトレンテ12層出土)

b. 小皿その2 (I-b) (9・10) 口径11~10.9cm, 高さ2.4~2.25cmで、前者よりもひとまわり大きい。底部は丸底に近い形で、ヘラ切り痕と板目がみられる。また両者の口縁に煤の付着があり、灯明皿として使用されたのであろう。量的には少ない。

c. 杯 (I-c) (14~18) 口径15~14.4cm, 高さ3.45~3.1cmで褐色を呈し、胎土に砂粒を含んでいる。器壁は厚く断面でみると凹凸が多い。器面は内外とも横なでで内底の部分は縦なでになっている。底面は、ややふくらむ傾向があり、ヘラ切り痕と板目がついている。15の



第11圖 土師器Ⅰ類実測図 (1~18はFトレンチ10層, 19~26はAトレンチ, 27・28  
 ・30・31はGトレンチ, 29・32・33はE-5区, 34はC-9区, 35はC-5区, 36  
 ・38はE-1区, 37はFトレンチ, 40~44はD-3区出土)



第12圖 土師器底面拓影(1~4はI類, 5~10はII-2類, 11はII-1類, 12はII-3類)

底面は第12図の4である。

高台付碗 (11~13) 口径15.7cmの深めの碗で、底部ははりつけ高台である。高台内の底面には、ヘラ切り痕と板目がついている。胎土は精製され器面は研磨されている。内面および口縁外部は黒味をおびているが、他は灰白色を呈し、瓦器質である。

碗 (19~23) 口径16.2~15.0cm、高さ3.9~3.2cmの丸底に近い底をもつ土器で、黒褐色ないし黄褐色を呈し胎土は精製されていて器面は平滑である。底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。

三脚付土器 (24) D-7区の7層から出土した土器で、白黄色を呈し胎土は精製されている。底部にはヘラ切り痕がみとめられる。脚は一本しか残存していないがおそらく三脚であったと思われる。脚は手づくねでつくられ、先端はやや外側に向いている。

## II 類 (第11・12図、図版4の11~17)

糸切り底の土器をII類とした。しかし、出土地点や土層でかなり相異が認められるので次の3グループに分類した。

(1) (第11図19~26) Aトレンチの特に北側落込み部分から出土した土器群である。底面には糸切り痕と板目がついている。

a. 小皿(II-1-a) (24~28) 径8.4~7.9cm、高さ1.25~1.2cmで灰黄色を呈し胎土に砂粒を含んでいる。器面は横なであるが、内底は縦なである。底面に糸切り痕と板目がついている。

c. 杯(II-1-c) (19~23) 口径14.2~13.4cm、高さ3.3~2.55cmで黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含み器壁はやや厚い。器面は横なであるが内底は縦なである。底面には糸切り痕と板目が見られる。23の底面は第12図の11である。

(2) (第11図1~18、図版4の11~15) Fトレンチの10層から発見された土器を一括して含めた。器種が少なく、器形もほぼ均一で、底面に糸切り痕と板目がついている。

a. 小皿そのI(II-2-a) (1~9) 口径8.4~7.6cm、高さ1.25~0.9cmの浅い小皿で黄褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。出土量の約半数を占めている。内外の器面には横なであるが、内底には縦なである。底面には糸切り痕と板目がついている。1・4の底面は第12図の5・6である。

b. 小皿その2(II-2-b) (10・11) 口径8.8~8.25cm、高さ2.1~1.65cmで、前者よ



りやや深い小皿であるが数は少ない。黄褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含んでいる。口縁部に煤の付着が認められ灯明皿として使用されたことがわかる。他には前者と変わるところがない。11の底面は第12図の7である。

c. 杯(Ⅱ-2-c) (12~18) 口径12.5~11.2cm, 高さ2.7~2.2cmで黄褐色ないし褐色を呈し少量砂粒を含んでいる。器壁の内外は横ながで、内底には縦なががみられる。底面には糸切り底と板目がついている。出土量の残りの半数を占めている。13・17の底面は第12図の8・9である。

(3) (第11図40~44, 図版4の16・17) D-3区の中層から出土した土器で、薄手で底部が小さく、底面には糸切り底のみがあり板目はない。量的には少なくともこの5点のみである。

杯 (40~42) 口径11.1~12cm, 高さ2.8cm, 底径約5cmで、黄白色ないし黄褐色を呈し胎土は精製されている。器壁は薄く、内外面とくに内面は荒いろくろ成形の痕がみられる。底面には糸切り底のみがついている。41の底面は第12図の12である。

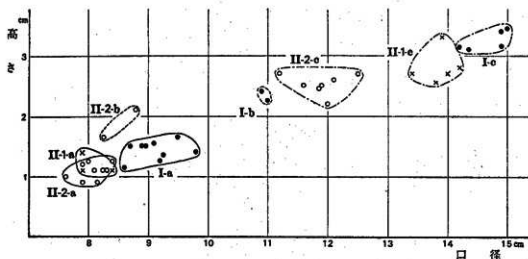
碗 (43・44) 口径12.5~11cm, 高さ4~3.8cm, 底径4.8~4.2cmでやや深く、灰褐色を呈し、胎土は精製されている。器壁は口縁で薄く底部に向うほど厚くなる。底面には糸切り底のみがついている。

#### その他の土師器 (第11図27~39)

小皿や杯は他の地区からまどまどではないが、かなりの量出土している。これらの土器の多くは、Ⅱ-1・2類に属するものと思われる。このほかのものとして37は浅い盤で、38はやや深い盤で糸切り底の土器である。39は高い高台を持つ土器である。これらの確実な共件関係は不明である。

浦城跡出土の土師器を以上のように分類してみたが、これらがどのように編年されるのか中世の土師器研究がまだ進んでいない現状では対比するものもなく、土師器のみで時代を推定することは困難である。しかし実際に土師器がいくつかのグループに分類できるので、おおよその編年の見当をつけてみた。

まずⅠ類のへら切り底とⅡ類の糸切り底との前後関係であるが、C-5区では第8層からはへら切り底の土師器が出土し、それより上層では糸切り底が出土している。同じようにD-7区では第7層からはへら切り底の土師器が発見されたが、それより上層では糸切り底が出土している。このことから層位的にへら切り底土師器(Ⅰ類)が糸切り底土師器(Ⅱ類)より古いことがわかる。



第13図 浦城跡出土土師器の法量

次にI類とII-2類の同一器形である「C・杯」を口径と高さにおいて大小をみевるとII-2類に小型化の傾向が見られる。この傾向を一つのめやすとしてII-1類を調べると口径はII-2類より大きくI類との間にくることがわかる。このことから時期的にもII-1類がII-2類よりもやや古いのではないかと予想される。

II-3類はD-3区の地表下40~160cmの間に散見し、その下のピット群からはII-1・2類に相当する土器が発見されている。そのことからII-3類が糸切り底土師器（II類）の中でも後出の土器であることがうかがえる。

以上のことから、これら4グループは、古い方からI類、II-1類、II-2類、II-3類の順になると推定される。

I類は、これに伴う白磁碗および瓦器質の碗から推定しても、平安時代末期~鎌倉時代初期に比定され、直接には浦城跡とは関係なさそうである。

次に浦城がおよそ鎌倉時代中頃から室町時代初頭にかけて存在したことからII-1類を鎌倉時代中期~鎌倉時代後半に、II-2類を鎌倉時代後半~室町時代初頭に、II-3類を鎌倉時代末期~室町時代に比定してみた。しかしこれはあくまでも推定であり、今後年代の明確な資料で修正されるべきものである。

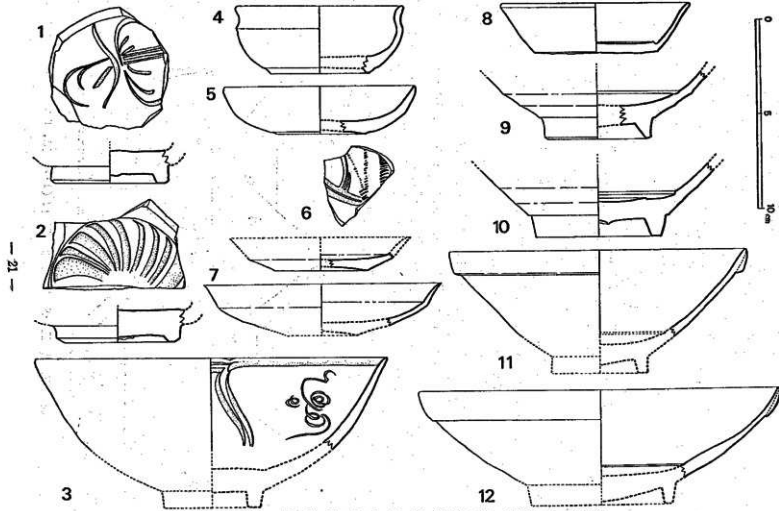
付記 第13図でII-1-cとII-2-cとの間に一つの空間があるが、Cトレンチ上層出土の土師器が、ちょうどこの空間をうめる位置にくる。しかし、まとまって出土したものでないので本文から除外した。

## 2. 陶磁器

発掘により発見された陶磁器は、極めて若干数で、しかも小片が多く全形を窺い  
少なかった。白磁及び青磁と呼ばれているものが多く、天目・陶器類は少ない。

青磁（第14図1～7、図版4）1は、底部の破片である。底径6.2cm、残存高1.7cmの  
底は篋切りにより作り出された、いわゆる削り出し高台である。器形は碗と考えられ、内面に形  
不明の文様が窺書きされている。胎土は暗灰色細土を使用している。釉は暗草色の透明釉であ  
る。2も底部破片である。底径6.4cm、残存高2.2cm、底は削り出し高台である。高  
釉が施されていて、しかも中心部に胎土と異った黄色土が付着している。これは焼成のときに  
台を使用した名残と考えられる。器形は碗と考えられ、内面に菊花を思わせる篋による文様があ  
る。胎土は灰色の細土を使用し、釉は草色を帯びた青色透明釉である。3は、口縁部破片であ  
る。復元径約18cmの碗である。内面には篋による文様が施されている。口縁部の一部に浅い  
切り込みがあり、文様もここで区分される。六区に分けられると考えられ、縦に「  
カーブした2条の区分線があり、この中に飛雲文が配されている。胎土は灰色の細土で、釉は  
暗草色の透明釉である。4も小片であるが全体を知り得る。口縁部近くでくびれた小鉢形の物  
で、口縁径約8.6cm、高約3.6cm。胎土は灰白色の細土を使用し、底部以外の全面に青草色の  
釉が施されている。5もほぼ全形を知り得る破片である。復元口縁径約9.8cm、底径約4.6cm、  
高2.5cmの皿である。底は篋切りされた平底である。底部以外の全面に薄い透明の青色釉が施  
されている。胎土は白色の細土が使用されている。6も皿の小片である。復元すれば口縁径約  
9.5cm、高約1.8cm、底径約4.5cmかと考えられる。底は篋切りされている。内面には篋及び  
櫛状の物による文様が施されている。胎土は灰白色細土、ライトブルーの釉が使用されてい  
る。7も口縁部小片で、復元すれば口縁径約12.5cm、高2.7cmの皿である。胎土は灰色の細  
土。釉は黄褐色半透明で剥離が著しい。

白磁（第14図8～12、図版4）8は、ほぼ完形品の深皿である。口縁径10cm、高2.7cm、  
底径6.6cm。底は篋切りされた平底である。胎土は白色の細土で、釉はやや青味のある白色  
で若干濁りがある。口唇部以外全面に施釉されていて、伏せ焼きされたことがわかる。9は、碗  
の底部小片である。底は径約5.5cmの削り出し高台である。内面には一条の沈線がめぐって  
いる。胎土は灰白色の細土、内面には若干青味を帯びた白濁色釉が施されている。10も碗の底部  
破片である。底は径6.6cmの削り出し高台である。内面には幅1.5cmの帯状の凹みがめぐって  
いて、ここには施釉されていない。ここに重ね焼による痕跡が残されている。胎土は白色の細  
土、内面及び外面上端に青白色の釉が施されている。11は碗の口縁部小片で、復元すると径約  
15.5cm。口縁部の外縁には断面三角形の粘土帯が接合されている。胎土は灰白色の細土、  
全面に若干灰緑色を帯びた白色釉が施されている。12も碗の口縁部破片で、復元すると径約  
20cm、口縁の作りは11と同じである。内面下部に一条の沈線がめぐっている。胎土は灰白色の



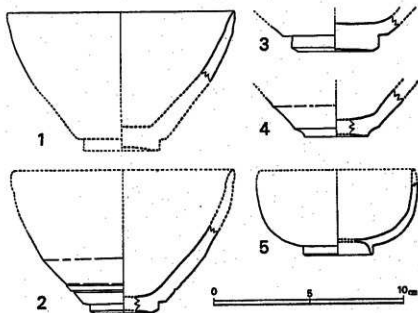
第14圖 青磁及び白磁実測圖 (1~7青磁, 8~12白磁)

細土、若干青味を帯びた白色釉が施されている。釉にはかん入がある。

天目（第15図1～4、図版4） 1は、茶碗の口縁部小片である。復元すると口縁径約12cmを数える。口縁直下にくびれ部があり、口唇部は尖る。胎土は灰黒色細土を使用している。釉は薄いところは茶褐色に、厚いところは黒色に発色している。2は口縁部を欠失した茶碗底部の破片である。削り出された底部の径は3.6cmを数える。胎土は灰色の細土を使用している。釉は底部近くには施されていない。黒色に発色し、釉が薄い部分は褐色に発色している。3も茶碗底部破片である。底部は削り出され、ここには施釉されていない。胎土は黄白色細土を使用している。釉は黒色に発色している。一部に0.5～1mmの斑点状に茶褐色の部分もある。4も茶碗底部破片である。底は削り出されているが、立ちあがりにカーブがあり2・3と異なる。

陶器（第15図5、図版4）茶碗の破片である。仕上げが美しく、技術的にも新しい物と思われ、高台も上手に轆轤で仕上げられている。底径約3.8cm、高さは約8cm位いかと考えられる。胎土は白色細土を使用し、釉は黄白色の透明なものを施している。かん入が多く、いわゆる「ひび焼き」と呼ばれるものと考えられる。

以上出土陶磁器の概要を述べたが、これら陶磁器の製作年代及び製作地について考えてみたいと思うが、筆者にとってこの問題は大変困難なことである。陶磁器類が、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器等のように器形や文様による編年が容易にできるものではなく、土・



第15図 天目及び陶器実測図(1～4天目, 5陶器)

釉の状態等を大きく考えなければならないことや、文献資料等によってもこの問題を正確に解決することは無理である。

したがって、筆者の若干の経験的感覚と共伴遺物及び参考資料とから一応の製作年代と製作地を考えてみたい。しかしながら、これら陶磁器は当時においては貴重な器物の一つであれば、長く使用されることも考えられ、積極的に時期を限定し得るものではない。

第14図1・2・3・7は龍泉窯系青磁と考えられ、8の皿はその施文法から珠光青磁と考えられる。8・9・10・11・12は宋代華南地方で作られたものであろう。なお、この白磁類は埴塚及び火葬墓等から発見されることがあり、平安末から鎌倉初期に考えられている<sup>(1)</sup>。また、11・12の白磁碗はI類土師器と確実に共伴して、互いにその年代を推定することができる<sup>(2)</sup>。

これら青・白磁類は、大宰府周辺に多く見られ、日宋貿易によりわが国にもたらされたものである。

第14図4・5は前記青・白磁類より新しいものと考えられるが、時期、製作地については判らない。

天目茶碗も日宋貿易によりもたらされた。博多湾中から発見されたものや、大宰府町字横岳所在崇福寺跡等から発見されている。崇福寺は、湛慧禅師により仁治元年(1240)創建され、文永九年(1272)大応国師開山の禅寺である。この寺跡発掘調査によって鎌倉後期遺構から発見された天目茶碗と浦城跡発見の物と同種のものと考えられる<sup>(4)</sup>。

第15図5は、近世陶器と考えられ、釉のかん入の状態等を考えれば鹿児島県所在の薩摩焼かと考えられる<sup>(5)</sup>。

註1 小田富士雄「周防の国衙」第三節東国衙の遺物(防府市教育委員会刊、昭和42年)

2 前掲書 第二節西国衙の遺物

3 小田富士雄・畠久嗣郎「筑後柳坂山永勝寺の遺物」(史跡と美術332号)

小田富士雄「筑後堂ノ平経塚と出土瓦」(史跡と美術309号)

4 鏡山猛「日本の考古学VII」Ⅲ古代・中世における地域の問題—2 大宰府と博多(河出書房、昭和42年)

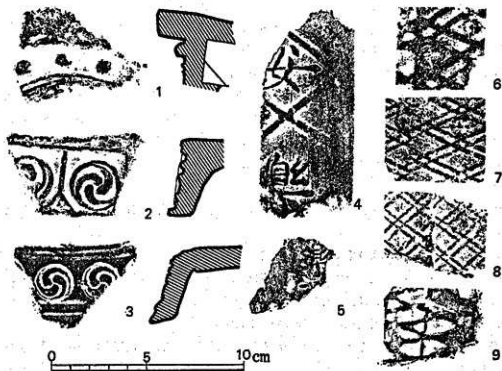
5 崇福寺の発掘調査は、昭和42年福岡県史跡調査会(会長長沼資海)によって実施された。遺構面は二期にわかれ、第I期は鎌倉後期、第II期は出土遺物から室町期と考えられている。

### 3. その他の出土遺物

土師器・陶磁器以外の出土遺物としては、若干の瓦と、壺、火舎、スリパチ等の日用雑器類と銭、刀のハバキなどが出土した。

瓦類(第16図)A・B・I・Jトレンチなどの高い所では、瓦の出土は少なく、B以下

の谷間となっている部分からの出土が少量あった。このうち、軒丸瓦は1点、軒平瓦は2種3点であった。

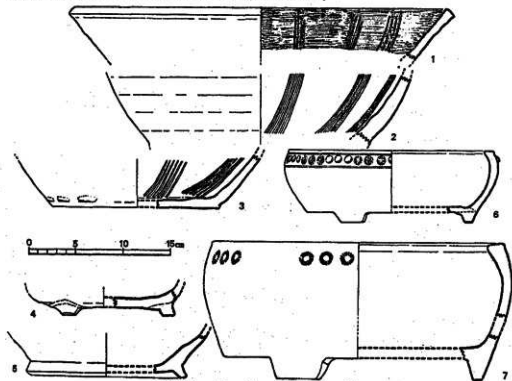


第16図 出土瓦類

1は軒丸瓦で、文様は巴文であろう。瓦当、丸瓦の部分とも荒い砂つぶが見え焼成も良くない。瓦当と丸瓦の接合にあたって丸瓦の内側をV字形にヘラでカットし、粘土を盛りあげて接合している。室町時代頃のものと思われる。Aトレンチ拡張区から出土している。2は、剣菱の中に巴を入れた軒平瓦である。類例としては、武蔵寺、大幸府天満宮、宇佐弥勒寺、香椎宮出土のものがあげられる。鎌倉時代のものである。<sup>(1)</sup> 武蔵寺、<sup>(2)</sup> 大幸府天満宮、<sup>(3)</sup> 宇佐弥勒寺、<sup>(4)</sup> 香椎宮出土のもの。灰黒色で焼成も良好である。Gトレンチから出土している。3は平瓦の先端を折りまげて、軒平瓦としたものである。瓦当面は、巴のスタンプを1つ1つおしつけて文様としている。瓦当の上下の縁は、指で横方向になてたものであろう。室町時代の瓦であらう。淡いレンガ色に焼き上り粘土の質は良いが、焼きは悪い。他に1点、おなじスタンプをつけたものがある。D-5区4層およびHトレンチから出土している。4は「安楽之寺」の文字瓦である。平瓦の凸面に叩打されたものである。10世紀初頭のものである。<sup>(5)</sup> E-1区から出土している。5は小破片で、丸瓦とも平瓦とも、判別は出来ないが、楽の字がスタンプされている。楽の字が4に比較してあまりにも小さいので中山博士が紹介されている「安楽寺」と書かれた方の文字瓦かと思われる。平安時代末<sup>(6)</sup>

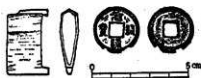
頃のものと思われる。灰黒色によく焼成され胎土も良い。Hトレンチ第12層から出土している。6～9は、平瓦の破片に見える叩打具の文様である。いずれも縦方向に叩打されたもので平安時代のものである。なおこの他に、平瓦、丸瓦とも表面をすり消したものが若干ある。

日用雑器類(第17図)1～3は、摺鉢である。1と3は土師質で、2は須恵質である。1はAトレンチ出土で、3もAトレンチ出土で胎土焼きともわるく、物をすりつぶすことが出来るとは思えない。室町時代頃のものか。2は、表面がやや赤味をおびた土器で胴の部分のみである。3は1よりは焼きがいい。幅広い楕状の道具で摺鉢の目をつくっている。Aトレンチ表土より出土している。4は土師質である。脚一つが残っているが、おそらく三本となろう。足は6・7と比較して胴部から一直線につづくものではなく足だけをあとからはりつけている。底部は円盤をはりつけたもので胴部との接点が段となっている。鎌倉時代のものか。出土地点は不明である。6・7は、火舎である。焼き上りは6はチョコレート色をしているが、胎土は悪い。表面は、よく研磨され、肩部に二条の沈線を入れその間に3コの付点をはりつけ、3コの菊花状のスタンプと交互に配しているAトレンチ黄褐色土層から出土している。7は、レンガ色の焼きあがりで、6に比較して、さらにやわらかく粗雑な感じである。肩部に中心部を抜いた菊花状のスタンプ3つを単位として付されている。6・7ともに鎌倉時代から、室町時代ころのものであろう。Aトレンチ拡張区から出土している。



第17図 日用雑器類





第18図 刀のハバキ・元祐通宝

金属類 (第18図) 元祐通宝は、南宋の  
 高宗の時(1185年頃)に作られたものである  
 が、これは、それをもとにしてわが国で作られた私  
 鑄銭である。Aトレンチ拡張区から出土している。刀  
 のハバキは、錆をとめるための金具である。銅製で

ある。Bトレンチから出土している。

以上、瓦、雑器類、金属器類など略記したが、Aトレンチにかなりのものが出土している。  
 総じて鎌倉時代から室町時代のものが多かった。

註1 中山平次郎「古瓦類雑考9」(考古学雑誌第7巻4号)

塔原庵寺 (福岡県文化財報告書第35集)

2 天満宮宝物館所蔵

3 小田富士雄氏の教示による。

4 関野貞「瓦」(考古学講座第1巻 雄山閣, 昭和3年)

5 中山平次郎「古瓦類雑考4」。(考古学雑誌第6巻9号)

6 同上

7 小田富士雄「壘前における歴史時代資料」(古代学研究15・16)

## 6. お わ り に

報告の終りにあたって、いささかのまとめを見てみたい。

### 遺 構

・「コ」字形の山の部分でA・B・I・Jの各トレンチを尾根に設定した。ここではすでに多くの遺構は削平されていて、わずかにAトレンチに東西溝と石列があり、時期を異にする建築物があつたであろうことを想定させた。

谷の部分では、山際のDトレンチのみに、いささかの、柱穴らしいのが見られた外はC・E・F・G・Hのトレンチでは、土層の堆積状態を見たにすぎない。なお、C及び、Fトレンチから、一括資料としてあつかえるだけの土師器が出土した。

### 出 土 遺 物

・C及びFトレンチの土師器の一括資料により、土師器は、I類及びII類に分類でき、層位関係からI類が先行するものであることが確められた。II類の土師器は、出土地点別に器高、口径などの差が見られ、II-1、II-2、II-3の三つの分類ができた。これには、大きいものから小

さいものへの時間的な変化が、予想されたが土層からも伴出遺物からも証明はできていない。

・土師器に伴なって、青磁、白磁、天目、陶器、火舎、摺鉢などが出土し、土師器の年代を知るうえに、いささかの示唆が得られたが、同時に土師器との共存関係も知ることが出来た。

・金属品としては、私鑄銭、刀のハバキ、鉄片などがあつた。

大宰府、大宰府天満宮資料等から

浦城は少武氏の城であつて文和2年には確実に存在している。

この城は長沼先生の説では、弘安5年の鎮西奉行所の設定の際、少武氏へ幕府の恩賞として与えられた城である。

・この城の最後は、はっきりとはしないが、前後の記録から康安元年頃かと思われる。

以上、発掘調査の結果を略記したが、次の点が問題として残つた。

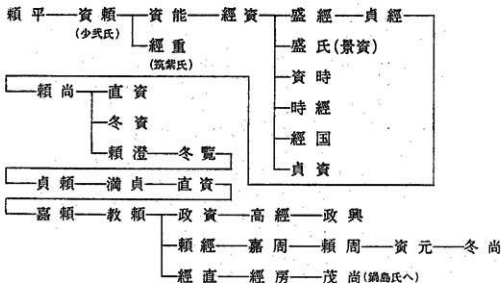
・浦城は、宅地造成のためすでに山の部分をけずつて谷の部分をうめているが、谷の部分の遺構及遺物は、ほとんど手がつかないまま残された。今後、発掘調査の機会があるならば、より準備された発掘計画が必要とされる。

・中世の土師器の編年が一応予想されたが、証明された部分はわずかである。今後より多くの証明する資料がまつれる。

・浦城から出土した土師器のI類は、直接、浦城以前になにかがあることを予想させた。原山無量寺、あるいはそれ以外のなにかを考えることが必要となつた。

## — 付 —

### 1 少武系図 (読史備要より)



## 2. 少武氏略年表

和暦	西暦	記	事
建久3	1192	7.	頼朝征夷大將軍となる。(日本史年表, 歴史学研究編) ①
建久年中			武謙資頼, 筑前, 豊前, 肥前の守護職となる。(嶋津文書) ②
元仁1	1224	10.3	資頼, 大宰少武に任ぜられる。(明月記) ③
安貞2	1228		少武資頼歿す。(筑後国史) ④
貞永1	1232	4.	幕府, 貞永式目を制定する。(日本史年表) ⑤
		8.13	幕府, 鎮西奉行資頼を罷め, 子資能とする。(吾妻鏡) ⑥
寛元1	1243		是歳, 内山寺衆徒, 博多承天寺を焼たんとし, 承天寺及大宰府崇福寺を官寺とする。(建一國部年譜, 元亨釈書) ⑦
文永5	1268	1.	蒙古の使人, 大宰府に来て書を呈す。(関東評定伝, 本朝通鑑等) ⑧
		同1.5	大宰府, 蒙古国書を幕府に送る。(一代要記, 深心院開白記等) ⑨
文永6	1269	3.7	元使黒的等, 対馬に来る。(帝王編年記, 東国通鑑等) ⑩
		9.24	蒙古使者金有成等対馬に来る。少武等, 使者を大宰府にとどめる。(歴代鎮西志, 関東評定伝等) ⑪
文永8	1271	9.19	元使趙良弼, 今津に来る。大宰府, 元の国書の副本を幕府に送る。(五代帝王記・関東評定伝等) ⑫
文永10	1273	3.	元使趙良弼, 再び大宰府に来る。(東国通鑑, 高麗史等) ⑬
		11.16	少武資能, 幕府の命により, 豊前, 筑前, 肥前, 老枝, 対馬の御家人に名字有限交名を大宰府に提出させる。(山代文書) ⑭
文永11	1274	10.5	元兵対馬に来る。(八幡愚童記, 帝王編年記等) ⑮
		10.14	元, 老枝を侵す。(同前) ⑯
		10.19	元, 今津に来る。翌日博多にせまる。大宰少武経資等, 諸士を率いて拒戦す。 (同前) ⑰
			大風おこり, 戦艦 200余沈没。(同前) ⑱
建治1	1275	2.4	少武経資, 九州御家人の蒙古警固番役を定める。(比志島文書) ⑲
		12.8	幕府, 高麗を征伐のため少武経資に鎮西, 山陰, 山陽諸国の提取水手をあつめしむ。(東寺百合文書) ⑳
建治2	1276	10.	幕府により少武盛経, 鎮西諸國に異国警固の石築地を構築せしむ。(深江文書)㉑
		10.21	少武経資, 異国征伐の幕府を管下の武士に下す。(武蔵神社文書, 広瀬文書等)㉒
弘安2	1279	3.25	元使, 博多に来る。之を斬る。(関東評定伝等) ㉓
弘安4	1281	5.22	元, 老枝, 津島を侵す。(壬生官務家日記抄等) ㉔
		6.5	元, 能古島志賀島に至る。(同前) ㉕
		同7.1	大暴風雨にて元兵退散す。(壬生官務家日記抄等) ㉖
		同7.13	前大宰少武資能歿す。(筑後国史) ㉗
			是歳, 北条時定鎮西に下向し奉行所と称す。(歴代鎮西志) ㉘

弘安 5	1282	是歳、岩門、大宰府の構築の命令あり。(追加)㊟
弘安 8	1285	是歳、少武経資、筑前国岩門城に兵を挙げ敗死す。(歴代鎮西志等)㊟
	10.19	幕府、少武経資等に蒙古合戦の勲功賞を分配せしむ。(大友文書)㊟
	12.28	幕府異国警固のため鎮西の諸士を下向さす。少武入道淨忠(経資) 他二人を守護人とし、武藤盛資、経平等を宗人とする。(北志島文書)㊟
正応 1	1288	10.3 鎮西諸藩所奉行少武経資等、蒙古合戦勲功賞の配分を行う。(志賀文書)㊟
正応 5	1292	8.2 大宰少武筑後守経資歿す。(歴代鎮西史)㊟
正安 1	1299	1.27 幕府、少武経資等4名を鎮西評定衆となす。(大友系図、武家名目抄)㊟
	4.10	幕府、鎮西引付衆を定む。(薩藩旧記)㊟
正安 2	1300	7.16 有智山と原山と闘争す。(広源文書)㊟
延慶 1	1308	1.25 少武盛経歿す。(筑後国史)㊟
正和 5	1316	1.6 幕府、探題末補のあいだ少武貞経、大友貞宗に警固役の沙汰を命ず。(大友文書)㊟
元亨 1	1321	8.12 幕府、探題末補のあいだ少武貞経、大友貞宗に警固役の沙汰を命ず。(大友文書)㊟
嘉歴 2	1327	是歳、鎮西評定衆を定む。武藤盛資等9名。(鎮西引付記)㊟
元弘1 } 元徳3 }	1331	10.17 後醍醐天皇、討幕の軍を興す。(新田八幡宮文書等)㊟
元弘3 } 正慶2 }	1333	12.13 菊池武時、大友貞宗、少武貞経と鎮西探題北条英時を討たんとす。貞宗、貞経 の妾心により武時独りで攻む。(博多日記)㊟
	3.16	少武貞経、大友貞宗等兵を以て探題府を守る。(博多日記)㊟ 鎌倉幕府亡ぶ、 (日本史年表)㊟
	5.25	少武貞経等、探題北条英時を攻め自殺せしむ。(山田文書、指宿文書)㊟
	5.26	尊良親王、大宰府原山に鎮ず。(上妻文書、近藤文書等)㊟
	6.10	少武貞経等、鎮西評定の状を建武新政府に奏す。(大平記、大友文書)㊟
建武 2	1335	12.23 少武頼尚、新田義貞等を討つとの儀に応じ、鎮西の諸士を招く。(探題記録証 文、竜造寺文書等)㊟
	7.30	肥後菊池武敏、大宰府を攻めんと発向す。(新編会津風土記、陀唐文書)㊟
延元2 } 建武3 }	1336	2.5 少武貞経、所領を次郎資経に譲る。(筑紫古文書)㊟
	2.25	足利尊氏、京都から放走し九州に来る。少武頼尚之を迎える。(梅松論)㊟
	2.29	少武貞経、菊池武敏等のため、大宰府に攻められ有智山に於て自殺す。(陀唐 文書、北肥戦誌等)㊟
	3.3	尊氏、大宰府原山一坊に入る。(梅松論、歴代鎮西志)㊟
	4.3	尊氏、大宰府を発して東上す。少武頼尚之に従う。(梅松論、大平記)㊟
	6.	鎮西管領一色範氏となる。(小代文書)㊟
	11.7	尊氏、幕府を開き、少武頼尚等建武式目を答申す。(建武式目)㊟

延元4	1339	7.17	少武頼尚、肥後国で交戦す。(阿蘇大宮司惟澄申状、宗像神社文書)◎
貞和1	1340	3.23	肥後相良氏等、少武の所領を攻めとる。(相良家文書)◎
貞和3	1342	5.	この頃以降、少武頼尚肥後南部に転戦す。(阿蘇大宮司惟澄申状)◎
貞和4	1346	9.11	少武頼尚、肥後の南軍を討つため出発す。(阿蘇文書)◎
貞和5	1346	閏9.2	少武頼尚、肥後守山岡等を攻め恵良氏に敗北す。(阿蘇大宮司惟澄申状)◎
正平1		11.21	幕府、鎮西の政務を一色範氏に委任す。(藤原旧記)◎
貞和2	1347	8.5	少武頼尚、肥後南軍と講和する。(阿蘇大宮司惟澄申状)◎
正平2	1348	3.35	少武頼尚、幕府の命により紀伊の南軍討伐に加わらんとす。(政正原田記附録)
貞和3	1350	4.3	少武頼尚、肥前、肥後の敵を討つため大宰府を出発する。(相良家文書)◎
貞和4		9.	足利直冬、尊氏に討たれ大宰府に来る。(大平記)◎
正平5		9.28	少武頼尚、足利直冬側につく。(松浦文書、阿蘇文書等)◎
貞和5		10.16	足利直冬、兵を九州に挙げ少武、大友氏等従う。(圓太郎)①
貞和6		11.15	一色直氏、直冬、頼尚等退治のため幕命に命を請う。(延島文書)◎
正平6	1351	3.3	将軍尊氏、直冬を鎮西探題となす。(圓太郎、歴代鎮西志)◎
貞和2		8.3	少武頼尚、一色範氏等を攻む。(萩藩閩録)◎
		9.24	尊氏、直義と和睦し、直冬を討たしむ。(豊後古文書)◎
		9.29	少武頼尚、一色範氏と戦いて勝つ。(有浦文書)◎
	1352	10.25	征西将軍、懐良親王、筑後国府に入る。(大友文書)①
正平7	1352	閏12.16	一色範氏、繪旨により足利直冬を大宰府に攻めんとす。(古文雜稿)◎
貞和2	1353	11.25	直冬頼尚等、一色範氏を攻め破る。(圓太郎)◎
正平8	1353	2.2	これより先、少武頼尚、一色氏のため大宰府浦城に攻められる。是日、菊池氏の助けで一色氏と針摺原に戦つて之を破る。(北肥戦誌、後風土記拾遺等)◎
正平14	1359	8.6	少武頼尚、直賢等、南軍懐良親王と大保原に戦う。(豊造寺文書、大平記)◎
延文4		11.10	後光厳天皇、少武、大友氏に懐良親王等を討たしむ。(圓太郎、大友文書)◎
正平15	1360	4.11	肥後、筑後の南軍、大宰府有智山城を攻む。(豊造寺文書)◎
延文5	1361	6.	九州探題斯波氏経、赴任す。(大平記)◎
正平16	1361	8.6	菊池氏、大宰府を攻めて少武頼尚を破り、大友氏、少武冬資を攻めて之を遣り、頼尚、豊後へのがる。征西将軍懐良親王、大宰府に座す。(大平記、北肥戦誌)◎
貞安1	1362	5.23	少武頼澄、懐良親王につく。(大宰寺文書)◎
正平17	1362	9.21	少武冬資、九州探題斯波氏経等と共に、長者原で菊池と戦い敗北す。(深江文書大平記)◎
貞治1	1363	春、	豊後九州探題斯波氏経に少武頼尚破れ、四国に通る。(大宰寺文書)◎
正平18	1363	7.	征西将軍、少武冬資を豊前に攻め破る。(阿蘇文書)◎
貞治2	1367	11.26	少武冬資、鎮西に帰る。(花宮三代記)◎
正平22	1371	12.19	九州探題今川貞世となる。(山内首藤文書)◎
貞治6	1372	12.24	少武頼尚没す。(歴代鎮西志)◎
貞治7	1372	2.10	少武冬資、今川氏に従う。(毛利文書)◎
天保1	1374	11.	少武冬資、足利義満より肥前、筑前(又は、筑後)の内を給う。(北肥戦志等)◎
天保2	1375	8.26	少武冬資、今川貞世に誘惑さる。(花宮三代記)◎
永享2	1376		是夜、少武頼澄大宰府有智山城に、大内氏のため攻め敗らる。(北肥戦誌、入江文書)◎

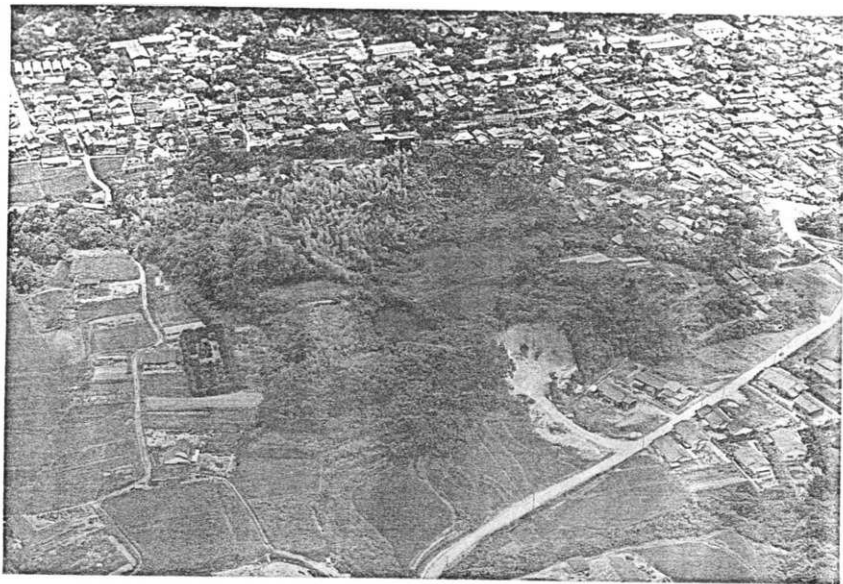
(大宰府、大宰府天満宮史料中世編1~8 九州文化総合研究所、大宰府調査文献班編などから引用した。)

凶

版



浦城跡航空写真(南から)



浦城跡航空写真（北西から）

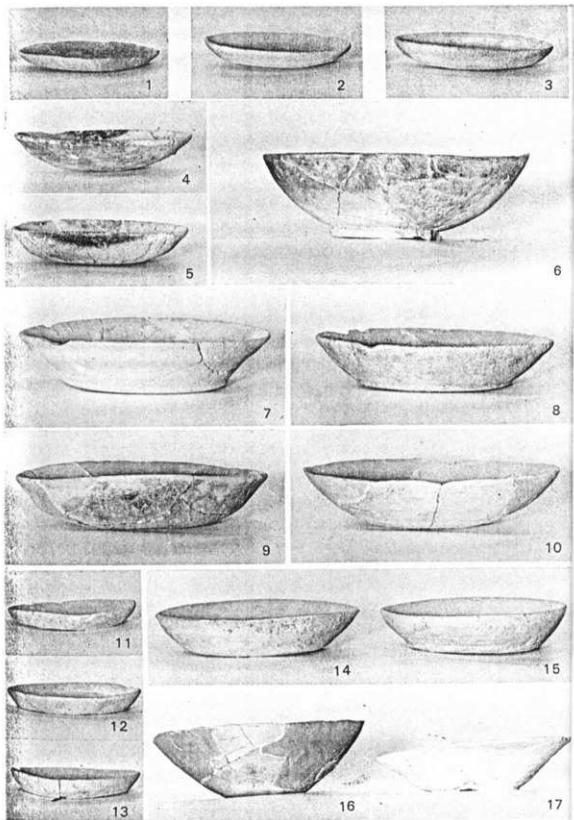




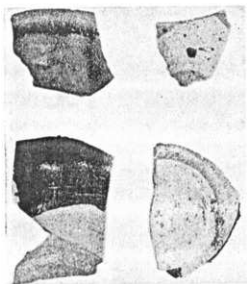
(1) 浦城跡中央部谷間



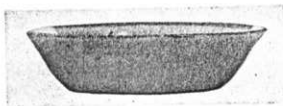
(2) 浦城跡から太宰江平野を見る〔矢印は天拝山(天判城跡)〕



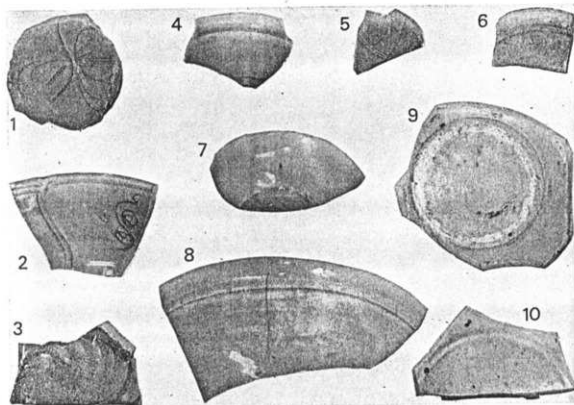
出土土師器



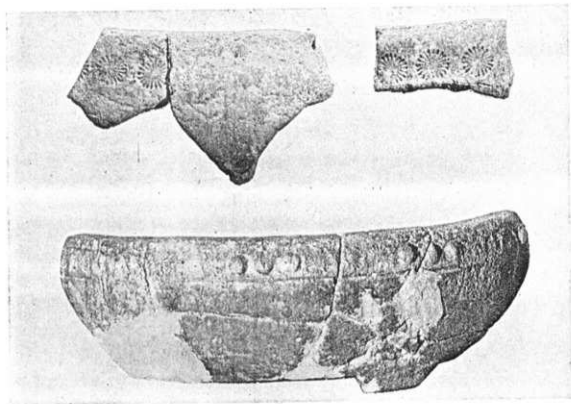
(1) 天目



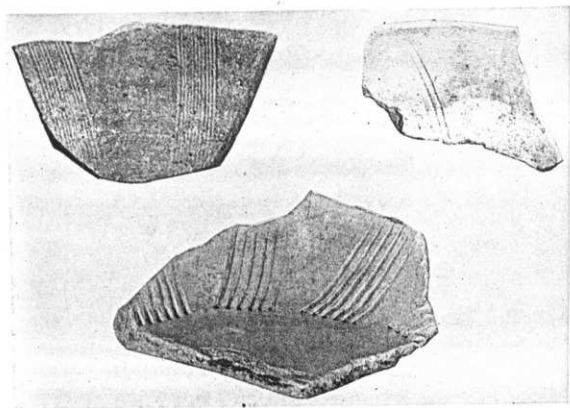
(2) 白磁深皿



(3) 青磁及び白磁 (1~7—青磁, 8~10—白磁)



(1) 火 合



(2) 摺 鉢

福岡県文化財調査報告書 第45集

昭和45年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷 栄光印刷株式会社

福岡市清水1丁目16番地の1